
さあ人生を楽しもう

たんそくレトリバー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さあ人生を楽しもう

【Nコード】

N4287Z

【作者名】

たんそくレトリバー

【あらすじ】

平和で無害に生活していた男が気がついたら異世界に、
だけど気にすることもなく異世界で平和に生きていく話。（本人談）

だが異世界はその常識を持たない男の非常識な行動が原因で人間、
魔族問わず巻き込まれていく。

自重？なにそれおいしいの？を合言葉に好き勝手書きます

ギャグやらバトルやら悪知恵やらいろいろ詰め込むつもりですが、
なにぶん初投稿なのでいろいろ不手際があると思います。それでも
良いという方はどうぞご覧ください

第一話 千本ノックと閃光魔術

なんかいきなり目の前が真っ白になった。

何だよ誰だよいきなり俺の目の前で閃光手榴弾破裂させた奴、
こんないたいけな一般人に非常識なもん使っんじゃねえよ

ちよつと豪華客船に潜入して乗組員簞巻きにして海に放り投げたり
半殺しに

したくらいで大げさすぎだろーが、もうちよつと常識つてもんを考
えろよ。

やった奴出てこいよ、千本ノック（守備位置バッテリーとの距離3M
以内）で根性
叩き直してやるからよ、

とかなんとか考えてたらようやく視界が回復してきた。

さあて、どんな仕返しがいかなあ。

直径10Mくらいの無人島見つけて素っ裸で置き去りにしてやろう
かなあ

（男2人のペアで）

10日もたてばアーツ！な関係になってるかもしれんなあ
まあ気持ち悪いから迎えになんて行かないけど。

少しづつ視界が開けていく中、俺はそこでふと視覚以外の五感で違
和感を感じた。

おかしい

さっきまでしていた潮の香り、波の音が消えている

肌に感じていた風もいきなりやんだ

自分は間違いない船の船首甲板にいたしここは海のと真ん中だ
突然船の揺れが止まるはずもない。

どう考えてもおかしい

有り得ない事態に本能が警鐘を鳴らし即座に行動できるよう体勢を
整え

周囲への警戒レベルを最大まで引き上げつつ視力が回復するのを待
った。

そして視覚が完全に回復してその違和感は決定的になった。

「は？」

隣から間抜けな男の声が聞こえた

なぜかそこは船の上ではなく石造りの大きな部屋の中央だった。

「な、なんだ、何が起きたんだ！」

隣の男が騒ぎ出す

身なりからして高校生くらいか

ぱっと見かなり整った顔をしている

身長は170位、スマートってという言葉が良く似合う体格をしている

少なくとも女に困ってることはないな
きつととぼけた顔しながら何人も泣かせてきたんだろう

こいつがさっきの閃光^{スタングレネード}手榴弾の犯人だろうか

おそらくこいつが犯人だろう

いや、こいつが犯人に違いない

てゆうか犯人ということにしよう

イケメンは何時如何なる時、どんな状況でも俺の敵だ、

よし、あとで閃光つながり^{シャイニンググワイザード}で閃光魔術をかましてやろう
ついでに額に油性ペンで巨乳と書くことも決定だな

べ、べつに私情で犯人て決め付けてるわけじゃないんだからね!!

まあそれはいいとして(後でやるから)

問題はこいつらか

そう思いつつ部屋の壁伝いにぐるりとこちらを囲んでいる集団に目をやった

なぜか全員中世にタイムスリップしたような格好をしている

全身を覆う鎧を着て槍や剣を持つ兵士達

絵画から抜け出てきたような貴族風の男女共

隣の男以外全員がこちらを凝視している

何だよ、なんか用かよ

イケメンと一般人を比較して楽しいか？

TVの整形手術のBeforeとAfter見比べてるつもりか？

ふざけんなよ、Beforeにも心はあるんだよ！

何が悲しくてあんな無表情になるか！

Afterを誇張しすぎなんだよ！

Before役の人の気持ちもっと考えてやれよ！

とかなんとか考えていたら

「よっこそ勇者様」

何時の間にやら俺ら二人の前に高そうなティアラを頭に付け

金持ちがでかいパーティでしか着そうのないドレスを着た

いかにもな王女サマっぽい女が立っていた。

お前がリポーター役か？蹴りかましてやるうか？

そう思いながら俺は同時に健康通信販売TVの

Before役の人達にメールを送った

第二話 何事も礼儀は大切です

「は、はい？」

隣の男がわけが分からないという顔をしながら王女サマっぽい格好をした女に顔を向ける

「初めまして勇者様、私の名前はエクレール、エクレール・フォン・バウムと申します。ここ」

「バウム王国の第一王女でございます」

「ぼ、ぼくは鷺沼英人さぎぬまひでこといいます・・・て、ばいむ？聞いたことない国

ですけどそれってどこにある王国なんですか？」

「ご存知ないのも仕方ありません、ここはあなた方が居た世界とまったく違う世界で・・・」

「え、ええー！それはいったいどういふこと・・・」

「それは・・・」

横でやってる会話に適当に耳を傾けつつ、俺は周囲の状況を確認していた

周囲の人間の数はざっと見4〜50人はいるがこちらとは距離をとっている。

多少警戒してるみたいだな。

近づいてきたのは王女サマのみか、

地面には魔方陣っぽい模様があり俺と鷺沼とかいう男はその中心に

いた

「つまりこの世界には魔神を頂点とした魔族っていうのが人間の生活を脅かしている？」

「はい、そしてその魔族の脅威から我々を救ってくださる勇者様があなた方なのです、

どうか力無き私たちの希望の光となってくださいませ」

「い、いきなりそんなこと言われても」

大抵こういう奴は結局引き受けるんだよな、んで魔王だか魔神だかを殺ったあと

「姫……」「勇者様……」とかいつてくっついてハッピーエンドって流れが王道だよな

けどまあ現実はその甘くなさそうだし

でもいまの俺はそんなことどうでもいいくらい重要な問題が発生し、人知れず頭を抱えていた。

腹減った

そついあ今日ろくに喰ってねえや

せつかく豪華客船に乗ったのにせいぜい見たのはパイナップル（手榴弾）くらいか

まあフルーツは食いたくない気分だったから投げてくれた人の口の中に

丁重にお返ししたけどな（トルネード投法で）

なんかえらいさわいでたなあ、そんなに俺の丁寧な対応に感動したんだろうか

感動しすぎて爆発してたしな、感動は爆発だ！っていう人なんだろう
礼儀は人間関係を円滑にする重要な要素だからな、俺ほどの人間だと
学ばなくとも自然とできてしまうのだよ

しばらく二人の会話が続けていたが

「わかりました、できるかぎりやってみます！」

という勇者サマの一言で場に歓声が広がった。

「おお」

「なんと凜々しい」

「これで世界は救われる！」

てな具合にね

ふむ、んじゃまあ場もいい頃合だしそろそろこいつらの本性暴く
しますかね

「あー盛り上がっているとこ悪いけど、あんた重要なこと
言っていないぞ」

今まで沈黙を続けてきた俺の言葉に少し驚いた表情をしながら
鷺沼とかいうのと王女が同時にこちらに視線を向けた
ていうかこいつら俺の存在に気づいてたのか
無視されてるからまったたく気づかれてないのかと思ってたぜ
イケメンといい女てのは違う次元に居るのかと本気で
思ってしまうところだった。

「俺たちを元の世界に戻せるのか？」

俺の一言で場が静まる、そして一部の人間から俺へと向けられる強い一つの感情

あ、感じてる！ワタシ、感じちゃってる！！（殺気を）
こ、こんなにたくさんの人から感じちゃうなんて！！（殺気を）
く、くやしい！でも感じちゃう！！（殺気を）　ビクンビクン

王女はさっきとはうってかわってなかなか言葉を発しない

「そ、それ「もちろんですとも！！」

王女の言葉を遮る馬鹿でかい声の主はそういつつこちらに近づいてきた

「あなた方をもと居た世界に帰すこと、これは当然できます、ですがそれにはしばらくの月日が必要でございます、異世界の扉を開けるには色々準備が必要です、申し遅れました、私はここバウム王国の大臣をしているものでございます」

そう言って深く頭を下げてきたメタボ爺さん、（名前名乗ってたけど忘れた）

うーむ、まずそうだな、焼く前から失敗確定だろう、喰ったらスタミナダウンしてしまう。マンガ肉どっかに落ちてねーかな、異世界なんだしそこらへんにぼろっと落ちてそうなんだけどな。

「もし勇者方様がご帰還を希望されるのであれば、残念ではございますが元の世界へお送りいたします、ただ先程も申しましたように異界への扉を開けるには有る程度の時間が必要でございますのでその間は王国で貴賓待遇で対応させていただきます」

「へー」

つまり帰す方法はない、そして断るなら還す（土に）ってことかな、さてどうしようかな、

まあ取りあえず飯食わせろ、話はそれからだ
腹が減ってはアーツ！

また感じる！ワタシスツゴク感ジチャツテルウー！！！！（殺気を）

第三話 イケメンの顔は潰す為にある

というわけで、やってきました玉座の間

目の前にはロープでよく見る玉座に座っている王冠かぶった
ひげもじゃジジイ、そして部屋にはさっきの取り巻き共もきている
ちなみにさっきの姫さんはジジイの横にいる

「おぬしらが召喚された勇者か」

された、じゃなくてためーらがしたんだろうが
なんて本音は当然言うわけも無くここでも俺は黙っていた

「はい、私は鷺沼英人といいます、この世界の平和の為、
できうる限りのことをするつもりです」

俺が黙っている理由は二つ

ひとつはこつという堅苦しい空気が嫌いだから
こついうところはイケメン君に喋ってもらってたほうが絵になるだ
ろう

「うむ、よくぞ言ってくれた！おぬしの活躍に大いに期待している
ぞ」

そしてもうひとつは俺がシャイボーイだからだ

こんなたくさん人が居る中でなんか話すなんてめんどk・・・

シャイな人間にできるわけないじゃないか、初対面の人には恥ずか
しさの余り

もれなく目潰し、金的、延髄蹴りをしてしまう俺には難易度が高す

ぎるのだよ。

というわけで王様へのお披露目もすんだのでさっさと部屋を出

「では10日後に早速魔神の住む魔神城におぬしらを連れて行くので準備しておくように」

ようとして足を止めた。

ん、んん？今このジジイなんつった？10日ゴ？マジンスムシロ？
大魔神の住む家なら東京のどっかにあると思うよ？

ピンポン押したらフォーケボール飛んできそうだけど

「え、ええ！！いきなりですか!？」

イケメン君が驚く、無理も無いな、素人が元とはいえ
メジャーリーガーを相手にするのだ。本気出されたら三振の山を
積み上げることしかできないだろう。

唯一の勝機はブランクによるスタミナ切れを狙うことか。
もしくはバット持ったの乱闘か

「む？もしやまだ説明しておらんかったか？」

「初めて聞きましたよー！」

「そうかそれはすまなかった、なに、心配はいらぬ、
何も魔神を倒してこいといっているわけではない」

長々とジジイの説明が続いたのでまとめると以下のようになる

・ 召喚された人間が魔神城に漂っている魔力に触れると
なにやら強い力が目覚めるらしい

・ 目覚める力は人によって違うのでどんな力かは
目覚めてみないと分からない

・ この世界の人間が魔神城の魔力に触れてもなにも起きない

・ 魔神城には特殊な魔法具を使って俺たちだけを瞬間移動させるら
しい

・ 一定の時間（説明からして約1時間程度だと思う）が経つと

自動的にこちらに帰ってこれるらしい

・城にいつても魔族と戦ったりする必要はまったくない

・魔族に遭遇しても召喚されたばかりの人間には不思議な力が働いており、あちらは手出しできないらしい。

ただしこちらがあちらに手を出すとその効果は即失われる。召喚されてから約15日経っても効果は失われる。

・すぐにあちらにいかないのは、まずこの世界の空気を体に馴染ませてからでないにあちらの魔力に触れた瞬間、体がやられてしまうかららしい

つまり行つて特に何もせず帰って来いって事らしい

説明が終わり、今度こそ部屋を出た

イケメン君は姫さんに呼び止められなにやら話していた、

おそらくすでに堕ちているんだろう

ああいうのは何もせずとも女を堕とすからな、

天然のジゴロって奴だな恋愛ゲームの主人公によくあるタイプ、

隙を見て今度顔を潰してやろう。

その後なんか個室に案内されたのでそこで用意した食事
(マンガ肉は無かった、残念)を食った後、俺は考えていた。
んー、なんか今日一日色々あったけどどうしようかなあ、
丁度あつちの世界は色々めんどくさくなってきてたんだよなあ
この世界は魔法やら何やら色々おもしろそうだよなあ
もとの世界には多少心残りはあるけど、本当に少しだけだしなあ

具体的には来週の週間少年本読んでおきたかったとか、
アレやそれ系の本処分しておきたかったとか、俺の属性が
分かってしまふあんなDVDを処分しておきたかったとか

まあ帰る方法も探せばあるだろうけどここで生きていくのも
楽しそうだしがんばってみよう！

さて、取りあえずは10日後に魔神城に行くんだけど・・・
せつかくこんな序盤にラスボスの城にいけるんだし、
ただ行くだけじゃあつままないよなあ？

よーし、挨拶代わりにお城の“お掃除”をしてあげるとするか
そうと決まれば明日からさっそく行動開始だな。
10日の間に色々準備しておくとしてよう
うーん、俺ってなんてやさしいんだろう
聖人君子も俺には及ばないだろうな

そのときその部屋に誰かがいたら、間違いなく背筋が凍り、恐怖で心臓が止まっていただろう。

蛇に睨まれた蛙のようなかわいいものではなく、

それこそ魔神に睨まれた何の力も無い子供のように

それほどに彼の表情は

冷酷、冷血、冷徹、残忍、残酷、残虐、極悪、非道、そのすべてを

孕んだ

満面の笑みをしていた

「さあ人生を楽しもう」

第四話 世界は矛盾とシンデレラでできている

とりえずあず次の日、来るべき“お掃除”のために色々と準備するため町にやってきました

そうそう、めんどくさくて（書くのが）色々説明してないことがかなりあるので（ ）の文字はなんだろうね、目の錯覚かな？）

今のうちにしておこう

まずこの世界の名前はウルジアというらしい

金の単位はGユーロ
ペナ

言葉は日本語で通じてる、勝手に翻訳されてるみたい
ちなみに字も日本語で書くと勝手にこの世界の文字になるし、
なぜかこの世界の文字も理解できる。

どうやらこの世界に來るとその辺の知識が
勝手に脳内に入るらしい

文化はまさにロープレな中世的かんじ
武器や防具が普通に売られており、ごつい鎧着た人が
ガチャガチャ音を立てながら歩いていたり
弓持った狩人みたいな人もいる。

市場もあり少なくともこの町は活気があるようだ。

おばはんが大きな声を出しながら売り物の果物っぽいもの
行きかう人にアピールしてたり、道具屋っぽい人が自分の薬っぽい

のを
客に説明してたり、あっちこっちでワイワイガヤガヤと喧騒が聞こえる。

さて、ではこの世界の肝となる部分を説明しよう。

この世界の生物はワーク（以下WK）と呼ばれる潜在的な職業を持っているらしく、

俗に言う「ジョブ」とはまったく別のことを指している、

この世界での「ジョブ」とは、その人が就いている職業の事を指すこと

に対しWKはその人が持つ潜在能力がどんなものを分かりやすく職業で表したものの、という感じ

例を挙げてみよう

商売大好きで商人になったがその人のWKは戦士系だった

その場合、その人は戦士系の才能である力や体力に大きな可能性を持ち、逆に

商人として必要な計算や話術等の才能はあまり見込めないということだ

つまり商人としては大成しにくいということである

ただそれを分かっているながらこの人のようにWKとジョブがちぐはぐな人が

けっこういるのだ。

まあそれには理由があるのだが後で説明する。

話がずれたがこのWK、結構深くできているらしい
まずWKはランク制になっているらしく

C B A 特A S 特Sというのを基本としているのだが
Cが一般的な職でAから上のWKはめったにいない、
ということ以外未知数らしい。

何しろ才能というものはそれこそ千差万別、人の数だけ存在するの
だ。

現在確認できているWKだけでも軽く3万は超えているが、

(そのうちのA以上で確認できているのは1割満たない) 未確認W
Kの

情報もかなりあるようで

総数は全く把握できないらしい。

しかも同じWKを持っている人でも成長や特徴がまったく違ったり
もする

さっきの戦士を元にロープレ風に例を挙げると

WKが同じ戦士系でジョブも同じレベル20のA、Bがいるとして、

Aは力が高いが技術が未熟、

Bは力は弱い、技術に長けておりAの使えない技も使える

と、こんな風にまったく違うタイプの戦士がいたりする。

つまりWKは文字どおり人の数だけ存在し、且つ同じだったとしても
一人として同じ能力、成長ではないのであくまで目安程度にして
おくとよい、ということになる。但し特定のWKやジョブでしか
覚えられない技や魔法もある

さて、では次にそれだけ大量にあるのにどうやってランク分けをして

いるのか？ということになる

答えは簡単で、道具、ていうか石を使えば良いらしい
「ハロー石」と呼ばれるもので、結構一般的なものらしく
これを両手で握り締め、約2分待つと石の色が変化するので、
その色で判断できるらしい。
未確認のものもこれでランクの判別が可能。

C 白 B 黒 A 銅 特A 銀 S 金 特S 虹

とこんな感じらしいのだが例外として、
このランクに入らない特殊なWKが
2種類存在する。

1つは犯罪者、これは犯罪を犯した人に追加されるWKで
これを所持している間は、人間としては扱われず、法により守られ
ることも無い、

且つ犯した罪によって大小の賞金がかけられる。
これを消去するには自身にかけられた賞金の倍額を専用の施設に
納めなければならぬ。尚、これを所持している間ハロー石は
その人の元々所持しているWKに関係なく必ず灰色になる

もう1つは固有WK、これは極めて稀なWKと認められたもので
ある種族しか持たない、特殊な育ち方をした等、普通の方法では
付くことがないWKである。このWKはものによっては特Sを超え
るもの
もあるらしい。又、このWKの場合ハロー石は上記以外の
の様々な色に変化する。

方法、といったのはWKはその人の鍛錬や思想、

生き方によって後天的に変わることがあるのである

CからBに上がったりもすれば、逆に下がったりもする
同ランクの全く違うWKになったりもするらしく、
その際WKの名称も当然変化する。

魔法使い 賢者 戦士 商人のように

つまり最初の例にしたWKが戦士系の商人も後に
WKが商人系に変化する可能性がある、ということである。
例の商人のような人はこれを期待しているのだ、
もちろんそうでない物好きもいるだろうけど

もつとも、全く違うWKになるには、ランクを上げるのと同じくらいの
時間と鍛錬が必要になるらしい。

ただ、ランクの変化にも個人差があるので、
あつけなくランクが上がったり変化したりもすれば、どれだけ鍛錬
しても
現状のままという人もいる。

ランクが上がると潜在能力の限界値と能力の上昇率も上がるが、
能力自体が上昇するわけではないので、必ずしも高ランク所持者が
低ランク所持者より優秀とは限らない。

そうそう、俺らが召喚された理由もこのWKにあるらしい。
召喚された人間は例外なくWKが初期から高位らしく、
且つ、ランクアップも極めて早いらしい。

だが、以外なことに今までに「勇者」というWKを持った
人間はいないようで、戦士系や魔法使い系の上位系統が

ほとんどらしく、そのWKに合わせて仲間やジョブを決めていたそうだ。

ちなみに「アンサー」という魔法を使えば、その人のWKやジョブが分かるらしい。

ただ、召喚された人間は力を目覚めさせないとWKとそのランクが分からないとのこと、魔神城に行くのはそのためらしい。

そしてジョブを変更する方法はWKよりも簡単で、

一般的にはレキ符という道具を使う。

使い方はなりたいたいジョブを書き、ハロー石と同じく両手で2分包む、すると裏にそのジョブなるための条件が書かれるのでその条件を満たせばいいが、条件は人によって全く違う。

ただしレキ符を使ってもなれないジョブもある、その場合は、何か別の条件を満たす必要がある。

(なれないジョブを書いた場合レキ符には何も書かれない。)
ジョブのほうにも固有のものがあ、ある種族にしかねないものや、

大きな活躍をしてなったりする、だがWKほど総数は多くない。

(ジョブ自体の総数がWKより遥かに下回るのが理由)

ジョブのランクは

一般職 上級職 最上級職 例外固有職

となっており上にいくほど能力に高い補正がかかること
ちなみに一般職からいきなり最上級職にクラスチェンジ
することは不可能。

あと、自分が装備できる武具はジョブによって決まっている。
戦士系のWKを持っていても、ジョブが魔法使い系なら
魔法使いの装備できるものしか身につけられない、
ということである。

長々と説明してしまったがこれを聞いた大抵の奴はこういうはずだ。

なるほど、わからん！！と

心配するな、俺もわからん。

まあそんなのがあると思ってくれてればいい。

長すぎて何言ってるか分からなくなったりしたしな。

矛盾とかあっても、それは俺が間違えて覚えたことだろうから
気にしないように。

なぜなら世界は矛盾で満ちているのだから。

と、締めたとこで説明はここまでにしとこう。

あとは追々していくので楽しみにしておくように。

さあ買い物買い物

べ、別にめんどくさくて投げたわけじゃないんだからね！

第五話 誓いは犠牲を払ってでも守るべし

なーんか面白いもん売ってないかなあ、
とうろついた結果、なかなかいいものが売っていた。

結構一般的に出回っている物のようで、ジジイ王から
もらった金額で十分買えるものだった。

そしてあつという間に10日たち、今俺は魔神城にいる。
使われてない古い空き部屋に飛ばされたらしく魔族側には気づかれ
ていない。

隣には勇者サマも一緒にいる。
そついあ勇者サマは俺よりかなり多く金を王サマから貰っていたら
しく

さらに国に伝わる由緒正しい剣や鎧などもいただいたらしい。
おかげで今の俺らはパツと見英雄とただの一般人に見える。
俺は武器も防具もつけてないからな。

ただまあ、なぜかこの勇者サマ、今大の字になって寝てるんだよね。
まったくこんなところで寝るなんて信じられないな。
なんで寝てるのか俺には分からんがみんななら分かるかも知れない、
さつき起きたことを思い出してみよ。

こちらに飛ぶ前から話してみよう。

「ヒデト様、どうかくれぐれも無茶はなさいませんように。」

「大丈夫ですよ、時間が来るまで大人しくしていますから」

と、両手を掴みながら見詰め合う姫とイケメン、共に顔が良いだけに絵になっている。現在地は最初に召喚された石造りの部屋（儀式の間というらしい）の魔方陣の上にいる

「ではお二人とも、これに触れてください」と姫の後ろに控えていたローブを着た魔術師のような奴が差し出してきたのは、サッカーボールくらいの水晶球だった。水晶の中心にはなにやら城のようなものがおぼろげながら見える。名残惜しそうにイケメンから離れる姫、そして俺とイケメンが水晶に手を置い

たと思つた瞬間に別の場所にいた。石造りなのは変わらないが部屋が小さくなっておりなんか埃っぽい、部屋の隅には蜘蛛の巣が張つてある。何より充滿している空気が明らかに先程と違う。空気に体全体が圧迫されている感じ、確かにこれは慣らしておかないときついだろうなあ、と周りを見ながら思っていた。

「うん、ここなら大丈夫そうだ、時間が来るまでここに隠れているのが良いと思うんだけどどう？」

と言いながらこちらに顔と体を向けてくるイケメン君の右膝の上には

「え？」

なぜか俺の左足が乗っついていて、

そのまま俺は階段を駆け上がるかのように右膝を体ごと地面から蹴り上げた、
すると右膝は吸い込まれるように

「ぐあっ！」

イケメン君の顔面にHITした。

見ててくれたか、世のモテない男子諸君、俺はやったぞ、君たちの怨敵を一人片付けたんだ。
これで世界は一步平和に近づいたんだ！

俺は一度した誓いは守るのだ、例えそれがどれほど理不尽であろうとも！！

自分の浮いた体が地面に着地するまで俺は満足感に浸っていた。

だがそこで俺は自分の大きな過ちに気づいた

「ぐうっ、なんということだ、油性ペンが無い！！！」

これでは誓いを果たせない、額に消えない傷（巨乳）を残すことができない！

俺はがつくりと膝を落とし、両手を地面につけた。

みんなすまない、俺の不手際でこんなことになってしまった。何でもっとしつかりと準備を整えておかなかつたんだ！

俺は自分を許せなかった、千載一遇のチャンスを生かせなかったのだ。

「だが、俺はあきらめない！これでどうだ！」

取りあえずそこらへんに落ちてた棒を鼻に突っ込んでおいた。

そして話は冒頭に戻る

どうかな、わかつたかな？

分かった君はおそらくIQ300はあるはずだ。

おそらくこれはフェルマーの最終定理クラスの難問だからな。まあ俺はフェルマーの方は分かるがこれは全く分からない。

仕方ない、ここは安全そうだしそもそも魔族は手だしできないんだし、

ここで寝てても大丈夫だろう。

俺はお掃除をしなければいけないので行くとする。

ゆっくり扉を開けたが外には誰もいなかったので辺りの気配を伺いながら

部屋を出た。

どうやらここは地下のようだな、辺りは薄暗く、

すぐ近くに階段がありそこから少し光が指している。

さて、んじゃまあ行くとするかな

俺の潜入技術スニッキングと買ってきたあれらを使い

見事にお掃除を完遂して見せる！

「うむ、異常なし」

と、魔族 A は今日も自分の持ち場の見回りしていた

彼は魔神城の中の魔族で一番下の魔族を統括している立場にある。

本来なら割り当てられた部屋でのんびりできる立場なのだが

生来の生真面目な性格のため、自身も持ち場を持ち、見回りをして
いるのである。

彼はまだ知らなかった、これから起こる大事件の一端を自分が
担うことになることを。

第六話 魔神城（笑）

その日も魔族Aは異常がないことを確認しつつ、いつもどおり見回りをしていた。

すると少し離れた所にある曲がり角から、見ない顔の下級魔族の姿が見えた。

こちらから声を掛けようとしたとき、向こうがこちらに気づいて、慌てた様に小走りしながら近づいてきてこう言った。

「はぁ・・・はぁ・・・は、初めまして、わ、私。ついせ、先日、城の警備に

は、配属されたもので、ふう・・・はぁ・・・、今色んな方々にあ、挨拶に伺って

いる所です・・・ふう・・・ふう」

ふむ、新入りか、私は城にいる下級魔族による警備の指揮を執る立場ではあるが、下級魔族を自分で選んで城に配属させることはできない。当然だ、ここは魔神の住む城、すべての決定権は魔神様にある。ということはこの下級魔族も魔神様の御目に留まり、城の警備という誉れ高い役目を賜ったのだろう。

だがどうやら走り回っていたらしく、息もたえだえに話をしており、肩も上下させている。相当あちこちの挨拶回りをしたんだろう。

「そうか、私はお前を指揮する立場にあたるものだ、これからは私の指示に従うように・・・しかし見回りをする前からその様子では心もとない、少し休憩してくるといい」

かなり疲れている様子だったのでAはそのように声をかけた、しかしその魔族は、

「い、いえ、それよりも重大なほ、報告が・・・はあ、ふう」

と、言葉を返した後、その魔族は呼吸を整え、息切れを落ち着かせはじめた。

Aもその方が報告とやらを聞きやすいと思い、落ち着くのを待った。そしてようやく落ち着いたので魔族はゆっくりと話し始めた。

「先程も申したとおり、私、先日魔神城に配属されたばかりで、今の今まで城の方々にご挨拶をしていたのでございます、すると先ほど　　を守護しているあの御方・・・えーっと」

「ギマルツ様か？」

「あ、はい！そのギマルツ様をお見かけしたのですが・・・」

ギマルツ様が。

数々の人間の強者、勇者を何人も屠り、最強の魔族の一人に数えられている。

魔神様の信頼も厚く、直々に「勇者殺し」のWKを与えられた御方。その腕を振れば海が割れ、その足を動かせば大地が震える。

最強レベルの魔法をいくつも使え、さらにその身には最高の武具を着けている。

まさに魔族の勇者と呼ぶにふさわしい御方、ゆえに彼の御方はあの場所の守護を任されているのだ。

そのような御方にお会いできたのだ、この新入りの感動はひとしおのものだろうと私は思っていた、だが新入りはそこで

表情を曇らし、その後の言葉を中々口にしなかった。

「どうした、何かあったのか？」

私が尋ねると新入りは顔を俯けながら言った。

「いえ、こんな話を私のようなものがしても信じていただけるかどうか・・・」

「ふむ、取りあえず話してみるがいい、信じる信じないはともかく、話を聞かなければ始まらない。それにお前も誰かにそのことを

報告するために走り回っていたんだらう？」

「わ、分かりました、すべてお話致します。」

私があちこちの方々に挨拶をしながら城を歩いていると、城の一角にある
曲がり角に差し掛かったのですが、そこでふと顔を通路の先に向けると

ギマルツ様のお姿を見かけました。

私のようなものでも知っているあの噂に名高い御方に会えるなんて、と感動に打ち震え、ぜひ挨拶をと思いつこうとしたのですが、なにやらどなたかと話をしていらしたのでそれが終わってからにし

よう

と思い、邪魔にならぬよう曲がり角に姿を隠して待っておりまして、すると会話の内容が漏れ聞こえてきたのでございますがその内容が、「ほう、召喚された人間か、ということとはここにはW Kを覚醒させるために来た、ということか」

「来たってゆうか飛ばされたって感じだな、気づいたらなんか知らん部屋に居たんだよ、ってかやっぱ俺が来た理由知ってたんだな」

「くくく、今まで何人の人間が召喚されここに来たと思っておる。しかしW Kやジョブも持たぬ人間が力に守られているとはいえこのわしと口が利けるとはな、普通なら心臓が止まっておるぞ」

「あいにく俺の心臓にはラッコ並に毛が生えてるんでね、ちなみにラッコの体毛の数は世界一位だ」

「・・・意味は分らんが、貴様が豪胆な人間だということはわかる、してなにゆえ城内をうるついでおる、時間が経つまで隠れていればよからう」

「なに、丁度あんたみたいな奴を探してたんだよ」

「・・・ほう?」

そこで私はさすがに我慢できず顔だけを出して話し声のする通路を

見ました、
すると

パチン

という音がしたと思うとギマルツ様の体が眩く光りだしたのです！

「ぐうううううおおおおお！、なんだ、これは！！力が、
力が抜けていく！！！」

「シルブレっていうものらしくてね、魔族の力を
弱めるものらしいよ」

「シルブレ・・・だと、バカな！！シルブレがこれほどの力を
持っているはずがない！体も動かぬ！ぬううう・・・何をした、
人間！！！」

シルブレとは特殊な鉱石を加工し、それに聖職者が祈りを捧げて完
成する

指先サイズの球体でそれを使うと魔族の力がしばらく低下する、と
いうものです、がギマルツ様のような最上級格の魔族には効果が無

い筈、
なのに！ギマルツ様は片膝を着き、片手で胸を掻き筆り、もう片方の手で
頭を抱え、とても尋常な御様子ではありませんでした！

「こいつは普通のと違ってね、
本当にとびつきり強力な魔族にしか効果がないっていう変わり物らしい、
シルブレクエスタとか、店主はご大層な名前付けてたけど、用は欠陥品で奴だな、
普通の魔族相手にはただの石ころだしな。
値段も安かったし・・・だがまあ、物は使いようだろ？」

そう言うと、私が目にしたその人間は

本当に楽しくてたまらない子供のような

満面の笑みをしていました

第六話 魔神城（笑）（後書き）

六話からしばらくギャグが少なくなります、
ギャグばっか書いてたからなんか落ち着かない

第七話 魔神城（笑）ですか？いいえKファイアです（前書き）

読み返してみても余りにひどかったなので全体的に改訂してみました
これからもちよこちよこやってしまい御見苦しいかも知れませんが
御了承ください。

第七話 魔神城（笑）ですか？いいえKファイアです

目の前の光景を私は信じられませんでした。

あのギマルツ様が何の力も持たないただの人間に膝を屈しているのを、

ですが本当に信じられないのはこの後に起きたことなのです。

「んーいい感じだねえ、安物なのにいい仕事してるな。」

「貴様・・・ぬうつ・・・しかし、所詮はシルブレであろうが！ならば効果はすぐに切れる、

その僅かな時間で貴様に何ができる！？」

「そこでこいつの出番なのだよ」

その人間はそう言ってズボンのポケットから何かを取り出しました。

「こいつはソウシの笛で奴だね、自分よりかなり格下の魔族に一度だけ

命令できるって物らしいぞ。

シルブレとセットで安く売ってたんだよ」

「ふん！どんな考えがあるのかと思えば・・・それで私を操ろうというのか？

いくら力が下がっているとはいえ、何の力も持たぬ人間ごときがわしより格上になる事など有り得ぬ！」

「気づいてないの？」

「何!？」

「言っただろ?普通のと違うって、あんたに使ったシルブレは確かに5分も持たない、だけど普通のととは違う二つの効果があるんだよ」

そう言つて、人間はその笛を吹きました。

「ぬぐわああああおおおつおおああああ
ぐぎいいいいいいいいああああああ
がああああああああああああああああ!」

「1つは対象の行動を封じること、もう1つは、効果中の対象はどんな道具の効力も無効化できなくなる、つまりこの二つを使えばあんたは無条件で1度だけ俺の言いなりになってしまうんだよ」

「ソ・・・んな・・・コと・・・ガ・・・」

「あ、ちなみに命令した後にシルブレの効果が切れても命令された事は実行することになるから、そこんとこよろしくね」

「カ・・・か・・・ガ・・・」

「・・・・・・・・」

そうしてギマルツ様の目に光が消えていきました、そしてそれを確認してから

「んじゃ命令「俺がこいつで合図をしたら城内で大きな騒ぎを起こし、

その混乱に乗じて魔神を殺せ」いいな？」

人間はそう言つて”何か”をギマルツ様に投げ渡しました

「ああ・・・わカッタ・・・」

ギマルツ様は何の迷いもなく頷き、その”何か”を受け取っていました

「よし、んじゃそれまで普段どおりに行動してろ」

そして、シルブレの効果が切れた後、ギマルツ様は何事もなかったかのように

通路の奥へ行つてしまわれました。人間はギマルツ様の背中を見送り、軽く

手を振つておりました。すると、

「ああ、ちなみにさっきのあいつの悲鳴は誰にも聞こえてないよ、そついう道具も使つといたからね、だからあいつの異変に気づく奴はいない」

と

「あんた以外」

こちらに背を向けたまま人間は言いました。
私は背筋が凍りついたかと思うほどその場で
動けなくなっていました。

「自分が他人を見ているとき、自分もまた
見られていると思え、ってやつだ、ああ、
今のこと別に言いふらしてもいいよ、
あんたみたいな明らかな下っ端が言ったところで
誰も信じやしないだろうからね。」

そのまま人間はこちらを見ることもなく、
奥の通路の闇に消えていきました。

何を言っているんだろうこいつは、

話を聞いた私の最初の感想はそれだった。

こいつ気がふれているんだろうか、それともなにか変なものを喰ったのだろうか、そう思っていた。

あのギマルツ様が人間に操られて魔神様の命を狙う？
有り得るはずがない。

あの方の魔神様への忠誠心は生半可なものではない、
死ねと言われれば迷いなく死ぬだろう。

殺せと言われれば一国の人間を皆殺しにするだろう、
だが間違っても魔神様に刃を向けるようなことはしない。
それは、魔族の常識と言えるくらい当たり前のことだ。

と、そこで私は新入りに視線を向けた。

最近城に配属にされたというのが私は全くこいつを見たことがない、
確かに部下を自分で選ぶことはできないが、

それでも何日かは居るといふのに
全く知らないなど有り得るだろうか。

答えは否、となるとこいつは恐らく変装しているのか、目的は
今言ったことを私に広めさせ城内を混乱させ、その隙に
魔神様を害する、というところか。

そう頭の中の考えがまとまった瞬間、私は魔族、いや侵入者
に向け、爪を振り上げ飛び掛った。

「な、何を！」

侵入者は慌てながらも私の爪を紙一重で回避していた。

「黙れ侵入者！そのような戯言を信じる者などこの城、いや
魔族の中にいるものか！！正体を現せ！！」

「・・・」

私がそう叫ぶと侵入者は顔を下に向けた、
ふん、観念したか。

そう思っていると、侵入者は懐に手を入れ何かを取り出し
私がおかをする暇を与えぬ速度で

ドズッ

「ぐー！」

それをそのまま自分の二の腕に突き刺した

「な！」

取り出したのはナイフ、それをそのまま自分の二の腕に深々と
突き刺したのだ。

そしてその侵入者は顔をこちらに向けこう
言い放った。

「信じていただけなのは承知の上！それでも、このままでは
魔神様の身に危害が及んでしまいます！

信用のあるギマルツ様だからこそ、難なく
魔神様の御前にまで辿り着けてしまいます！

そうならば最悪の事態も考えられます！
お望みならばこの四肢切り落としていただいても
かまいません！お願いです！どうか信じてください！！」

腕に刺さっているナイフをもう片方の腕で握り締め、
そうついなながらこちらを見る魔族。
刺さっている箇所からは青い血が滴っていた。

青い血・・・それは魔族の証、いくら人間が姿形を変えたとしても
血の色までは変えることはできない、そしてこの魔族の必死に訴え
る目。

先程までの自分の考えが歪んでいく、
私は間違っているのか？この魔族は真実を訴えていたのか？

「なぜ・・・下級魔族に過ぎない貴様がそこまでするのだ」
私は気がつけば構えを解き、そんな問いを投げかけていた

「確かに私は下級魔族、ですがそれでも誇り高き魔族の一人！
その私の神である御方の危急を知っていながら何もしないなど
できるはずがありません！！そして神を御守りする為に
どうして自らの命を惜しみましょう！！」

その魔族はゆっくりと、しかしとても強い思いを込めながら

そう言った。

私は・・・なんということをしてしまったのだろう。

この新入り、いや・・・誇り高い戦士を疑ってしまうとは、
軽率な考えでこの戦士の命を奪ってしまうところだった、
自分自身の無能さに恥ずかしくなる。

私は素直に正面にいる魔族に頭を下げた。

「すまなかった、お前・・・いや、貴公の言うことはもっともだ、
私とて、貴公と同じ立場ならなんとしても仲間に伝えよう」

「では・・・」

「うむ、貴公の言うことは信じがたい事だが、私はそれを真実として
受け止め、行動しよう」

「あ、ありがとうございます！」

その戦士はそういいながら、がばっと頭を下げてきた。

礼を言うのはこちらのほうだ、貴公のおかげで
私も魔族として大切なものを思い出すことができた。

「さて、ではどうするか、ということになるが、

我等のような者が上級魔族の方にもこのようなことは信じていただけまい、また、下手に先にこちらが行動を起こせばその人間も動きを変更してくる恐れがあるぞ。」

私は下級魔族を指揮する立場にはあるがそれでも階級的には精々下の上くらいだ、とても上の方には信じてもらえない。

むう・・・と二人で悩んでいると、何か閃いたのかその魔族は顔をパツ

と上げ、口を開いた、

「分かりました、ならばこういう方法はいかがでしょう」

私は彼の提案に賛成した、現状で我々にできるのは確かにこれが限界だ、だがこれならば魔神様への危険性はグッと下がるはずだ

「うむ、分かった、確かにそれが私たちにできる最良の行動だろうな」

私はそう答えた、すると彼は以外にも、

「ありがとうございます……ですがその前に一つ
やっておきたい事があるのです」

と、彼は更にもう一つの提案をしてきた。

「私はこれからギマルツ様の元にお伺いしようと思います」

「何を言う！危険すぎる！」

「あの人間がいつ合図をだすかは分かりませんが、ギマルツ様が
受け取ったあの”何か”を奪うことができれば事態は未然に防ぐこ
とが

できます、何も起きなければそれに越したことはありませんから。」

「貴公は……」

「もとよりこの命は魔神様のものです、それに私が消えたとしても、
私の事を信じてくださったあなた様がいれば私は安心して逝く事が
できます。」

彼は死ぬ気だ、死ぬ気でギマルツ様の下に行く気なのだ。

「ただ新人入りですのでギマルツ様のいらっしゃる場所が
分かりません、恥ずかしながら教えていただけないでしょうか？」

そう恥ずかしげに聞いてくる彼を、私は心の底から美しいと思った。

私はギマルツ様の居場所を教えるから無言で彼に握手を求めた、
私は彼に同じ魔族として尊敬の念を抱いたのだ。

だが彼は、

「その手は戻ってきてから握らせていただきます。」

そう言つて、来た時と同じように小走りをしながら廊下の奥に消えていった。

私は彼の背を見ながら天に祈つた。

どうかあの誇り高き勇敢な戦士と再び再開できますように」と

だが無情にも、この願いが聞き届けられることはなく、
Aと彼が再会することは二度と無かつた。

第八話 魔神城（笑）は今日も平和です

ギマルツは魔族の中でも最強の部類に入る強さを持ち、魔神への忠誠心も人一倍持っている。

魔神もそれを分かっているからこそ、彼にこの任務を与えているのである。

ギマルツはこの仕事を誇りに思っていた。

自らの忠誠心を魔神が十分理解していると、

今日も与えられた任務をこなしながらギマルツは、魔神への感謝を思い続けていた。

「あれ？」

するとすぐその曲がり角から魔族が姿を現した、

姿形から中位クラスの魔族と思われる。

何故かこちらを見て疑問の声をあげていた。

「貴様、ここに何用だ、返答しただけではただでは済まんぞ！」

そう言うとギマルツはその魔族を多少加減しつつ威圧した、

大抵の魔族、いや生物はこうすれば腰を抜かしてしまうのだ。

本気でやればそれだけで命を奪ってしまうこともある、

中級魔族は案の定、尻餅をつき、怯えた様子で慌てて

「ま、まままままってください！は、話を聞いてください！！」
そう言いながら早口で話し始めた。

「さ、先程上位魔族の方に『ついさっき
ギマルツ様が玉座の間に向かっていているのを見かけた、
随分慌てた様子だったから恐らくここが無人に
なっているだろう、私が説明しておくから
お前はギマルツ様が戻ってくるまで
変わりに任務をこなしておくように。』と
言う指示を与えられたのでここに来たのでございます、
決して嘘偽りなどではありません！！」

「何を馬鹿なことを、私は今日ずっとここで任務を
こなしておるわ！」

「え、え？」

「大方そやつが見間違えたのであろうが、能力はともかく、
私に似た武具と体格の持ち主なら上級魔族なら珍しくあるまい」

「いえ、で、ですが私もしかとこの目で確認しました、
随分急いでいる様子でしたがあれは間違いなく
ギマルツ様でした。」

「何だと・・・？」

私と同じ姿形をした者がいてその者が玉座の間に
向かっている？

「それが虚偽なればどうなるか分かった上でのことであるうな!？」

私はその魔族に先程よりも強く威圧しながらそう質問した。

「このような悪ふざけがどうしてできましょう! 私とて無断でここに来ればどうなるかくらいはよく理解しております!」

その魔族は今度は怯えることもなく強い口調でそう答えた。

目や体に不審な動きは見当たらない、
どうやら嘘ということではないらしい、

「つまり何者かが私に成り代わって玉座の間に向かっているということか・・・?」

私がそう呟くと、中級魔族は途端に顔を青ざめた、

「そ、そんな! それでは魔神様のお命が危険です!」

「馬鹿者が、折角変装していながらそのような慌てる態度をとる、その程度の輩に魔神様が遅れをとる分けが無かるうが」

そう、その程度の小物に魔神様を害する事などできるはずは無い、私はそう思ったがその魔族は先程とは別人のように

「何を言うのです！確かに小物かもしれませんがギマルツ様に変装しているのですよ！恐れながらギマルツ様は御自身が想像している以上に魔神様に信頼されているのです！万が一の事も十分考えられます！」

と、声を荒げながらまくし立てた。

「これから私はすぐに玉座の間に向かい、なんとしてもその侵入者を排除します！」

・・・しかし悔しいですが私のような中級魔族がいくら叫んでも誰にも信じて頂けない。

ギマルツ様！どうか私と一緒に玉座の間に来て頂けないでしょうか！？」

「む…」

中級魔族は激しい口調でそう言った

確かに侵入者が私に変装していれば、

この魔族が何を言ったところで誰も信じることはないだろう。

そもそも中位クラスでは玉座の間に近づくことすらできない、その侵入者はそのまま疑われることなく魔神様の下に難なく辿り着いてしまう。

とすれば・・・

魔神様は私に全幅の信頼を寄せてくれている。

この魔族の言うとおり最悪の事態も十分

考えられるか

「よかるう事は一刻を争う、すぐに向かうぞ！」

「は、はい！」

私はその魔族の横をすり抜けそのまま玉座の間に

「ぐぶっ！」

べちゃっ

行こうとするやと後ろから咳き込む声と

何か液体が地面に零れた時のような音がした。

私が振り返るとそこには片膝をつき、片手で口を

押しさえ、片手を地面につけ、小刻みに体を震わせている

先程の魔族の姿があった。

口を押さえている手からは青い血がだらだらと垂れている。

「どつした!？」

「や、やられました・・・あの時。妙な匂いがしていたので
気にはなっていたのですが・・・恐らく侵入者は毒を撒き散らし
ながら移動していたのでしょう・・・げふっ！」

中級魔族は再び青い血を口から吹き出す

「わ、私は恐らくもう助かりません・・・ギマルツ様、
お願いでございます・・・どうか・・・どうか魔神様を・・・」

御守りして下さい

今それができるのはあなた様だけです

最後の方は耳を近づけようやく聞こえるほどの細かい声
だったが確かにそう言って、その魔族は地に伏して
動かなくなつた。

私は身に着けていたマントをその魔族に向けて放り投げた、
マントはひらひらと舞いながらその魔族の全身を覆い被した

お前の最後の願いは確かに聞き届けた
だから安心して眠るがいい。

そう私は心の中で思いながらそのまま玉座の間に
駆け出した。

卑劣で卑怯な侵入者、絶対に許しはせん！
私の手で必ず八つ裂きにしてくれる！！

そう思いながら全力で駆けていると、すれ違う魔族達が
何事かとこちらを見る、

「侵入者が玉座の間に向かっていている！皆急ぎ駆け付けよ！」

と私が言うとその声を聞いた魔族達は慌て、戸惑い、驚き
様々な表情を浮かべたが、事態の危険性を察知し
私の後に続いた。

玉座の間の扉は開いていた
普段いるはずの門番も居ない
私は最悪の事態を想定し、
勢いをつけたまま乱暴に玉座の間に入った

玉座の間に居たのは魔神様と

本来その部屋に近づくことすら許されない筈の

一人の下級魔族が居た

第九話 今日ね、家（魔神城（笑））に誰もいないんだ・・・

「ふむ」

それが私が玉座の間に入ってから初めて言った魔神様の御言葉だった。

「まさかとは思っておったが、こうして実際に起きると信じざるをえんな」

「は、はい、私もまだ信じることができません」

魔神様と下級魔族が会話をする。

「魔神様！いえ、『アークリンデ様！』ご無事ですか!？」

私は叫ぶ、いや、吼える。

「ふむ、そう言ってここまでやってきたか、中々良い手じゃのう」

アークリンデ様は何一つ変わらぬ態度で答える

「まさか、御主程の力を持った魔族が人間に操られるとはのお・・・おもしろい道具も世の中にはあるものじゃな」

「は？」

アークリンデ様が何を仰っているのか私には理解できなかった

「まあ当然の反応じゃの、自分が操られていると分かるはずもなし、当時の記憶も無くなっておるのか」

「な、何を言って・・・」

「本当に残念じゃのう・・・まさか御主程の人材を失うことになるとはの」

そういつて

アークリンデ様がこちらに片手を向けると
周囲一面が真っ白な光に包まれて

「まっ・・・!?!?!」

ギマルツの存在はこの世から消え去った

玉座の間には魔神、アークリンドと
ギマルツが来る前から居た下級魔族
Aの
二人のみとなっていた。

Aは目の前の光景を見て何も言えず暫し呆然としていた。
先刻までそこにいたギマルツも含めた魔族全員、
すべて消え去っていたのである

「しかし今回の勇者は中々面白い方法を使ってくるのう」
ギマルツは魔神の名前を言っていたが、それは極めて高い
クラスの魔族だけが許されることで下級魔族が言えば
その瞬間に消されることもある。
魔神アークリンドは感心したようにそう言った

「自分で倒せぬなら敵の部下にやらせる、か
手段を問わぬそのやり方は中々好感が持てるのう、
御主が報告に来なければ面白いことになっていた
じゃろうな」

くくく、と魔神様はそう言って微笑んでいた、
確かにもう少し私に来るのが遅かったら、
こうまであっさりと終わっていなかっただろう。

あの時、私と彼が考えた手とは極めて単純、
ギマルツ様が何か騒ぎを起こした、と判断したら

それより先に玉座の間に行き、事の次第を報告する、それだけだった。

幸いギマルツ様のいる場所は玉座の間から距離がある、何かあればこちらのほうが早く辿り着ける。

ただ、私のような下級魔族では普通なら門番に止められる、そこで少し強引な手を使った。

彼の持っていた眠り粉を嗅がせて眠らせ、部下に適当な理由をつけて門番を移動させて介抱するように命令し、そのまま玉座の間に入ったのだ。

彼は戻ってこなかった、その事はとても悲しい、だが事態は最悪の事態を免れたのだ。

彼も天で満足していることだろう
そう思っていると

「い、一大事でございます!!!!!!」

そう言つて一人の魔族が駆け込んできた
今頃ギマルツ様の報告か、だとすれば遅すぎる。
魔神様もそう思っていたようで、

「遅いわ、今頃来たところですからすべて終わった後じゃ、
妾の命を狙っていた者はたった今すべて消えたわ」

そう仰つたが以外にもその魔族は

「えーい、いえ違います!」

そう言って、信じられないことを言い出した

「ほ、宝物庫がもぬけの空になっております！……！」

「……何？」

妾は思わず尋ねる

宝物庫……ギマルツが守護している……いや、
していた場所。言うまでもなくそこには魔神城の
すべての金銀財宝や伝説、神話級の武器、希少効果を持つ
道具など、様々な物が収められていた。

それが、全て無くなった？

宝物庫の鍵はギマルツが持っている筈だ、

鍵は妾が直接作った特別製、先程の

光程度では消滅しない。

ギマルツが消滅しても鍵はそこに残るはず、

だがギマルツの立っていた所には

塵一つ残っていないかった

ここに来る前に先に持ち出していた？

それなら鍵を持っていない理由が分からない

操られたのはつい先程、そもそも持ち出す時間は無い、しかもギマルツは合図が有るまでは普段どおりに行動するように命令されていたという、

仮に人間が宝物庫に進入しようとしたところで命令外の事ゆえ排除されるのは目に見えている。

命令する時に奪っていた？

それならギマルツが鍵が無くなった事に気づくはず

妾が思考しているとその魔族は続けて話し出した

「つい、今しがた通路でこのような物を拾い

宝物庫を見に行った所、宝物庫の扉が開いており

失礼かと思いましたが中を覗いて見た所、

な、何一つ無くなっており、

変わりにこちらにも壁にこんな物が・・・!!」

その魔族はそう言って二枚のカードを持っていた、

妾が指を動かすとそのカードはふわふわと宙を舞い

そのまま手元に来た、

そして妾はそのカードを読み始める

一枚目・・・その魔族が拾ったカードにはこう書かれていた

宝物庫のお掃除O・W・A・R・I・M・A・S・I・T・A（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4287z/>

さあ人生を楽しもう

2011年12月25日01時45分発行